

理科教育におけるジェンダーの研究<中間報告>

学習過程臨床分野 135057K 湯本 文洋
pyonn613@hotmail.com

[キーワード] 小学校理科 ジェンダー 行動・会話分析 直接面接 自己モニター ロールプレイング

1、研究の背景と目的

戦後の教育改革においては、教育の機会の平等のもと、教育の機会や内容における性による差異は見られなくなった。それは、男女共学の理念があり、その下で、同一の学校、カリキュラム、教師、教室といった機会均等が達成されることにより、教育における男女平等が成されると考えられてきたⁱ。

近年、若者の理科離れの傾向が強まり、科学に関する興味関心においては、女性と男性の間で大きな格差があることが指摘されている。例えば、「科学技術についてのニュースや話題に対する関心の調査」において、「関心がある」と答えた男性は61.1%であるのに対し、女性のそれは41.2%である。また「あまり関心がない」と答えた男性は25.5%であるのに対し女性の場合は47.7%と、非常に高くなっているⁱⁱ。

性別に関わらず個人の能力・個性が社会にいかされるような環境整備が熱望される昨今の情勢にもかかわらず「男女共同参画に関する世論調査」(内閣府大臣官房政府広報室,2002)ⁱⁱⁱによると「学校教育の場における男女の地位の平等感」の項目においては、男性の方が優遇されていると回答したものは14.5%であるのに、女性の方が優遇されていると回答したものは3.5%にとどまる。平等といわれる学校現場においても性差が存在していることが明らかになった。更に、学校現場におけるジェンダーの実態調査では、公的な学校現場においてジェンダーを固定し、社会的差別を強化しているという機能が明らかになりつつある^{iv}

また、理科諸科目の学業成績や履修状況及び、理系への進路選択において大きな性差が存在することも指摘されている。例えば、IEA(国際到達度評価学会)の国際共同研究調査として、1994年から実施された「第3回国際数学・理科教育調査」によると、「わが国の小学校4年生の男女差は14点で、男子の得点が女子より高く、アメリカの12点差まで有意差が認められる」としている^{vi}。神田(1988)は、進路選択について進路を決定する要因として、性要因が大学進学では学業成績に次ぐ第二要因となると報告している。これら理科教育

における性差は、生物的というよりジェンダー(社会的な性差)の違いによるものと考えられている^{vii}。松村ら(1996)^{viii}は『女性が理系力をもっと発揮しうのに、これまではその条件が満たされてこなかったために、現状を招いている』と述べている。更に『これまで理系能力を男性と同様に発揮してこなかったのは、女性の生得的な特性によるものではなく、社会的・文化的に作られたジェンダーとしての女性・男性の問題である』と述べられている。つまり、理科教育に関わる性差とそれに従属する問題は、理科教育におけるジェンダー問題^{ix}と捉えることができる。

欧米では子どもの行動を性別からの視点で分析した研究はいくつか見られるが、わが国においては、十分蓄積されたという段階ではない。また、子どものジェンダーの実態分析又は教師側の分析に研究の焦点が多くおかれ、ジェンダー是正のためのストラテジー(strategy)を実際の現場で実施し、その後の子どもの変容を明らかにしたものは僅少である。

現在、子どもが集団生活をおくる公的な場としての学校において、ジェンダー及び不平等なジェンダー秩序が伝達されること、しかも言説によって伝達されるだけでなく、子どもたちが、自ら演じる集団行為によって作りだされることの意味は大きい^x。従って今後も、学校現場をフィールドとし、ジェンダーに関する問題をより多く明らかにしていくことが大切であると考えられる。

従って本研究では、ジェンダーを強化していると指摘される学校現場をフィールドとし、小学校での理科教育におけるジェンダーの実態を明らかにするとともに、実態調査を行った児童に対しジェンダー是正のために自己モニター、ロールプレイングといったストラテジー(strategy)を実施し、児童のジェンダーに対する変容を明らかにすることを目的とした。

2 調査概要と結果 調査

調査目的

異性の理科に対する興味関心について明らかにする。

調査対象

長野県公立 A・B・C 小学校 4・5・6 年生
(対象 男 304 名 女 291 名 計 595 名)

調査期間 2001 年 7 月

調査手続き

各学校の地域性を配慮して、質問紙法で行った。

調査結果

約八割の女子が「男子は理科が好き」とらえている。その反面、男子は「女子は理科がすきか嫌いかどうかとも言えない」という回答が多く「女子は理科が好きである」という回答とあわせると、男子の半数以上は「女子は理科が嫌い」とは考えていないことが明らかになった。

調査

調査目的

理科授業におけるジェンダーの実態を明らかにする。

調査対象

長野県公立 A 小学校 4・5・6 年生
(対象 男 102 名 女 97 名 計 199 名)

調査期間

2001 年 9 月～11 月

調査手続き

理科授業を長野県 A 小学校において、4・5・6 年生児童の発話・行動を VTR2 台および各班にテープレコーダー1 台をおき記録した。分析に際しては児童の関心が高く、主体的な行動がしやすい実験場面を取りあげた。尚、自身は非参与観察^{xi}とした。

調査結果

実験中の児童相互の会話・行動分析から、ジェンダー的な発話・行動が随所に現れていることが明らかになった。特に高学年ほどその傾向は大きくなり、ジェンダー的な行為者は、女子より男子に多く見られた。

また、異性間だけでなく同性間にもジェンダーメッセージが交わされている事例が見られるなど、様々な形で社会的・文化的に作られた性差・性的役割規範が現れていることが明らかになった。

調査

調査目的

調査では、理科の授業における児童の意識が明らかにされた。また、調査では、理科授業でのジェンダーの実態が明らかにされた。そこで本調査では、理科の授業の中に自己モニター、ロールプレイングの制度を導入し、児童のジェンダーに対する変容を探る。

調査対象

長野県公立 A 小学校 6 年生

(対象 男子 38 名 女子 30 名 計 68 名)

調査期間 2002 年 4 月～5 月

調査手続き

児童の発話・行動を VTR2 台および各班にテープレコーダー1 台をおき記録した。そして調査後半(調査開始 3 週間目)において、昨年度の調査結果を基に、子どもたちに自己モニター、ロールプレイングを行わせ、その後のジェンダーにおける変容を記録・分析した。また、授業記録後、児童に対し直接面接を行い、併せて分析を行った。

調査結果

現在分析中であるが、自己モニター・ロールプレイングを導入することにより、多くの班に、ジェンダー是正に対する意識・行動の変容が見られた。更にはジェンダー是正という意識を超えるような児童の様子が明らかになった。また、直接面接では、自らを省みたこと、理科での班内の役割(gender role)が変容したことが明らかになった。

3、考察・結論

現段階で言えることであるが、理科の授業に際し、自己モニター、ロールプレイングを導入することにより、自分たちの授業の様子などを冷静かつ客観的に把握し、教師が特別な手法を用いなくとも自然発生的に子どもたち自ら改善策を講じ、変容することが明らかになりつつある。更に、このことが、児童間で相互に干渉しあうことで、よりジェンダー是正につながると推察できる。

3 引用・参考文献

ⁱ中嶋みさき：「学校のなかのジェンダー」、家庭科研究、pp.4-11、芽ばえ社、2002

ⁱⁱ文部科学省：科学技術白書、1994

ⁱⁱⁱ前掲書 2 >

^{iv}木村涼子：「学校文化とジェンダー」、頸草書房、pp.25-35、1999

^v森繁男：「ジェンダーと教育」研究の推進と現状、教育社会学研究第 50 集、pp.164-183、東洋館出版、1992

^{vi}国立教育研究所：第 3 回国際数学・理科教育調査最終報告書 小学生の算数教育・理科教育の国際比較、p.174、東洋館出版、1998

^{vii}松村泰子：「女性の理系能力を生かす」、日本論評社、1966

^{viii}前掲書 >、p.2

^{ix}赤井玄：「理科教育におけるジェンダー問題に関する研究 教師と子どもの相互作用をの分析を中心として」、広島大学大学院教育学研究科修士論文抄、p.197、1998

^x木村涼子：「教室におけるジェンダー研究」、教育社会学研究第 61 集、p.51、東洋館出版、1999

^{xi}宮崎あゆみ：「学校における『性役割の社会化』再考 - 教師による性別カテゴリーを手がかりとして - 」教育社会学研究 48 集、pp.105-123、東洋館出版、1991